

「聖徳太子平氏伝雑勘文」「上宮太子拾遺記」  
引書(漢籍)索引並証注

An Index and Notes to Chinese Books Quoted in  
*Shotoku Taishi Heishiden Zatsu Kanmon*  
and *Jogu Taishi Shuiki*

阿 部 隆 一  
*Ryuichi Abe*

*Résumé*

*Shotoku Taishi Denryaku* written in the early 10th century is a systematic collection of biographies of Prince Shotoku which all the biographies of Prince Shotoku written later were based on. *Shotoku Taishi Den Zatsu Kanmon* written as annotation to *Shotoku Taishi Denryaku* in 1314 by Hoku, a priest at Temple Tachibana, and *Jogu Taishi Shuiki*, a biography of Prince Shotoku written by the same author, are said to be the best notes to *Denryaku*. These two books contain quotations from not a few Japanese and Chinese books many of which have been found lost. In this article the writer shows an index to Chinese books quoted in Hoku's two books, annotates mainly lost ones among the indexed books, and inquires into the trend in studies of Chinese classics in Japan of the 13th and 14th centuries.



- I. 序
- II. 引 書 索 引
- III. 引 書 証 注
- IV. 結

I. 序

我が国の文化史上の一特徴として考うべきは、文藝復興期には必ず聖徳太子讃仰の風潮のたかまることである。文藝復興は復古運動と表裏をなすものであるから、自覚的な意味に於ける実質上の日本文化創立期の指導者たる聖徳太子に対する追慕崇敬の信仰心が世に昂揚し横溢することは当然である。太子伝記の撰述は夙に奈良時代に始まり、平安前期に至る間に、「上宮聖徳法王帝説」「上宮皇太子菩薩伝」「上宮太子伝補闕記」等を始めとして、現在全ては遺っていないが、数種以上の著作があげ

られる。その中で、先行の諸伝記を集成して現れたのが、「聖徳太子伝暦」2巻である。

同書はその諸本の大部分が巻頭書名の次に「平氏撰」と題するので、平氏伝とも呼ばれ、平氏に属する何人かの撰と解されるが、その撰者成立については明らかでない。嘗て故藤原猶雪博士は、大正震災で焼失した東大蔵本の本文及び奥書(菅家本)を審査した結果、本書は延喜17年堤中納言藤原兼輔の撰と推定した(「復原聖徳太子伝暦」昭和2年刊の考証参照)。しかし同書が延喜頃の撰になることはほぼ首肯し得るとしても、菅家本の奥書通りに兼輔の著とするには、未だ多くの疑念を抱かざるを得ない。本問題に関しては他日筆者は改めて論じたいと思っている。

伝暦が現われてから以後、太子伝は江戸時代に至るまで、その悉くが伝暦を基礎としてと称しても過言ではない。しかもその後各時代に引き継ぎ現われた数多い

阿部隆一：慶応義塾大学附属研究所斯道文庫。Ryuichi Abe, Professor, the Shidō-Bunko, Institute of Oriental Classics, and Lecturer, Japan Library School, Keio University.

太子伝の傾向は大まかに分ければ、伝暦の注釈の形をとるものと、伝暦を和文に潤色して物語化するものと、この二方向をとりながら進んで行っている。

伝暦注釈書中の白眉であり、その系列の最高峯をなし、以降の注釈の基礎となったのは、鎌倉末に成立した釈法空の「聖徳太子伝雑勘文」である。本書は上下各々3巻計6巻、伝暦の一語一語及びその記事の背景をなす史実由来関係事項について、和漢の内外典を渉猟して、博引傍証、詳細を尽している。巻末の起請文に自ら本書撰述の趣旨を述べて曰く、

起請文曰

仏子法空。敬白三世十方一切三宝梵釈竜天等而言。方今以此愚抄六卷。安置橘寺僧伽藍竹木目中。作起請文曰。願以之潛寄同心同学中鎮莊

上宮聖王之神徳。普増緇素貴賤之倚重。以之成就接受正法之大願也。然則以此愚抄不可令輒披見不可信非器之仁。凡此中所載者。槌勘本説明拋。更不引胸臆不実之事。設適有私料簡之事。此詳安私言。故都不可混其本拋之事者也。而當世專為誑無知之俗人引世間之財利。不勘正説之本拋。作出無窮之虛端。不実之祕事。冥慮実難測。当果尤可悲。然而若对此等之嚴重国史。不朽此文等。当世浮説。是非邪正。宛如照鸞鏡歟。何以此愚鈔遺留当寺。長流伝遐代。然則伽藍三宝護世四王牛頭天王聖。二所十八善神等。方加守護。努莫令混乱邪説。若背此等意願。以私曲為先。不顧邪正混乱。輒令披露此者。冥衆各立加照罰矣。仏子法空敬敬白。

正和三年二月十八日金剛仏子法空

と。この起請文から本書が花園天皇の正和3年(1314)の成立にかかることが判明する。著者法空の伝については、聖徳太子にゆかりの深い橘寺の上人であったという以外に詳かでないようである。元亨釈書・本朝高僧伝に見える法隆寺の僧法空の伝を本書の著者法空の伝と考える一説があるが、両書は共に「今昔物語」巻13「下野国僧住古仙洞語第四」の記に拠ったのであるから、時代が合わず、別人である。

法空の太子伝には本書の外に、「上宮太子拾遺記」7巻の著がある。それは雑勘文と同じく、和漢の文献を広く援証して、年譜順に太子の行状遺徳説話関係事項を細かに記して、先行の太子伝の闕遺を補ったものである。両本共に伝本の存するもの極めて稀れ、古写本の法隆寺に蔵される外、筆者はその所在を聞かない。流布本は「大日本仏教全書」聖徳太子伝叢書所収の活字本で、同書はその底本を明記しないが、奥書から見て、恐らく法隆寺

本に基づく翻印であろう。

ここに筆者がこの法空の二著書について論じようとするのは、両書撰述本来の目的たる太子伝に関してではなく、両書に引用された引用書についてである。両書は著者法空自身の文辞は極めて稀れで、全巻引用文の輯集から成っている。此は本書に限らず、平安以来の我が国の外典に対する注釈態度に共通する一般様式で、唐時代の注釈家の遺風を承けたものである。注を下すべき字句に対して注釈家が自己の言葉でその意味を平易に解釈する形を執るよりは、寧ろその語句を使用してある、出典となるべき典拠ある原文を引用し、或は関連事項の記事を掲載して、読者をして類推せしめる様式で、所謂事を引いて意義を説かずという方法である。従ってそれは或る意味で類書の編纂法式に通じ、注釈書は小類書の観を呈する。唐の李善の文選注はかかる唐代注釈法の好例である。後世になると此等夥しき引用書の中には佚書となったものがあり、引用文は校勘学上の貴重な資料を提供して、考証学者の喜ぶ所となっている。

「聖徳太子平氏伝雑勘文」「上宮太子拾遺記」の二書が仏典・国書・漢籍にまたがる豊富な引用を含むことは上記の通りである。引用の国書の中には既に亡佚に帰した幾多の諸本が見受けられ、貴重な佚文を含み、特に太子伝関係書では本書によってのみ知られる佚文を有し、既に研究者の注目する所となっている。しかし、太子関係以外の図書については学者は未だ殆ど考察を下していない。引用書中最も多種多様なのは漢籍であって、その中には和漢共に伝を失った亡逸書を多数含み、本書が書誌校勘学上極めて珍重すべき資料を提供しているにも拘らず、この観点からは本書は従来全く注目される所がなかった。

筆者はここに、法空の両書に引用された外典漢籍の索引を提示して、今後の研究の参考に拱し、それ等引用書中の佚書を中心として着目すべき典籍に対して簡単な目録学上の考証を企み、ついでそれ等引用書を通じて、本書撰述当時、即ち鎌倉末頃の我が国の漢学界の概況を考察しようとするのが、本稿の目的である。

## II. 引書索引

以下の索引は「聖徳太子平氏伝雑勘文」「上宮太子拾遺記」に引用された漢籍に限っての引書索引で、引書はほぼ四部の分類によって配列し、両書は「大日本仏教全書」本を使用し、書名下の各数字は仏教全書本の頁数、上・下はその頁の上・下段を示し、「拾遺記」の引書は数字の

前に「拾」の字を冠した。各経書の注・疏等は書名を別掲せず、各経下一括した。標目の通し番号に\*印を附してあるのは、その書に対しては(Ⅲ)に於てその数字によって注証を施した。索引数字の次の( )内の字は、該書の引用が、書名を以てせず、撰者名、所収篇章名等で引かれているか、或は注・疏からの引用であること等を示す。経書等で(並王注)の如きは易経文と共に王弼注をも併せ引用してあることを示した。賦・銘の類は恐らく「文選」によったと思われるので、「文選」の条下に繋いだ。索引数字の尾に×印を附したのは、「初学記」にも同文が引かれていることを参考にしたものである。(筆者が偶々気づいた箇所のみを記したので、決して精査したわけではないから、遺漏の多いことを恐れる。)

「君子集」が「楽天集」(23上)として9条引かれているが、白居易にはその著がない。同書は統群書類従巻 946所収本と同本で、邦人の編である。しかし本書引用文で群書類従本にない所があるから、類従本は完本ではなく、脱簡があるらしい。

本両書の成立は14世紀初頭であるから、その後幾階次かの転写を経た現伝本が誤写訛謬を免れないのは已むを得ぬ所であるが、大日本仏教会書本は、その底本を見ないが、誤植と推測される箇所を少からず見受ける。使用に当っては注意を要する。

本両書の本文中に「裏書」が挿入されている。この裏書は恐らく、撰者法空の記したのではなく、後人の追記と見なすべきであろうが、ここには便宜上、「裏書」に含まれた引書も採録した。

### 経 部

- 1 周易 魏王弼・晋韓康伯注 正義 唐孔穎達等疏  
45上下(正義) 45下 47下(並王注) 54下(係[繫]辭) 62下(正義云) 63上 65下(繫辭) 74上(並王注) 101上(並注) 拾49下 拾85上下 拾107上 拾121上(繫辭) 拾151上
- 2\* 易伝  
47上
- 3\* 易緯<sup>原作諱</sup><sub>今改</sub>  
拾28上×
- 4\* 河図  
32上
- 5 尚書 旧題漢孔安国伝  
1上 2下 29上 40下(伝) 41上(舜典並伝)  
54下(並伝) 63下(微干並伝) 71下 74上(夏書  
〔虞書大禹謨〕並伝) 拾85下 拾86上(孔安国云)  
拾96上 拾102上 拾103上(呂刑並伝) 拾103  
下(並伝) 拾105下
- 6\* 尚書考靈繹<sup>原作者</sup><sub>今改</sub>  
拾23上
- 7 毛詩 漢毛亨伝 漢鄭玄箋 唐孔穎達等疏  
40下(抑篇) 62上(疏) 62上(詩伝) 68上(並鄭  
注) 69下(並箋) 71上(並注箋) 79上(並伝箋)  
79下(蓼蕭章注) 106上(詩伝) 拾30上(詩伝)  
拾60上 拾100上(並箋) 拾101下 拾104上(並注  
箋)
- 8 韓詩外伝<sup>原作典</sup><sub>今改</sub> 漢韓嬰撰  
51上 56上 99上×
- 9\* 韓詩章句 漢薛漢撰  
97上×
- 10 周礼 漢鄭玄注  
13下 14上 29上(並鄭玄注) 69下(注) 72(並  
鄭玄注) 84上(注) 96下(鄭注) 拾88上 拾124  
上 拾125下
- 11 礼記 漢鄭玄注 正義 唐孔穎達等疏  
1上 13下(曲礼並注) 14上(曲礼下並注・内則並  
注) 14下(曲礼並注) 23下 29上(並注) 36下  
40上(並注) 45下 47上 67下(並正義) 68上  
(並注) 69下 79下 93下(並注) 拾2上× 拾39  
上 拾61上 拾95下(並注) 拾102上 拾103下 拾  
104上下 拾122下 拾126下 拾133下(曲礼正義)
- 12 大戴礼  
54下 74上
- 13\* 三礼図  
18上
- 14 春秋左伝 晋杜預注  
53上(並注) 64下 84上 拾96下(序並正義)  
拾101下 拾102上 拾105下 拾106上 拾122下
- 15 春秋公羊伝  
60下 拾105下
- 16\* 春秋伝  
拾1下×
- 17\* 孔演図  
61下
- 18\* 春秋説題辭  
18下(春秋説云) 61上×
- 19\* 春秋元命苞  
32上

- 20\* 春秋考異郵原作尤  
今改 78上 87下 94上 96下 拾32下 拾82上 拾85下 拾96上 拾133下
- 21 古文孝經 旧題漢孔安國傳 34 通俗文 漢服虔撰  
18上 46上(傳) 48上(傳) 52上(傳) 69上(傳) 40上 40下(服虔曰)
- 71上(並傳) 93上(傳) 拾84下 拾85上 拾85下  
35\* 玉篇 梁顧野王撰  
(傳) 拾86上(傳) 拾95下(傳) 拾98下(傳) 拾  
4上 14上 19下 26下 28下 29上 30下 32  
102(並傳) 拾104(並傳) 拾105(並傳) 拾106上  
上 39下 40上 40下 41上 45上 48上 49上  
(傳)
- 22\* 孝經私記 梁周弘正撰 16上 78上 80上 84上 87上(官本玉篇云) 93下 94  
下 96下 100下 101上 106上 拾9上下 拾  
23\* 孝經原作子  
今改述義 隋劉炫撰 45下 49上 27下 拾30上下 拾31上 拾59上下 拾60下 拾  
61上 拾64上下 拾84下(野王案) 拾88下 拾  
24\* 孝經說 19上 95上 拾98下 拾105上 拾108上 拾121下  
拾123下 拾124上 拾125下 拾133下 拾149下  
拾150上下 拾151上下 拾169上下
- 25\* 孝子內傳 60上 36 千字文 梁周興嗣撰 五代李暹注  
23上(序)
- 26\* 孝經緯原作律  
今改 106上 37\* 韻略 北齊陽休之撰  
11下 拾32下
- 27 論語 魏何晏集解 梁皇侃義疏 38\* 略韻  
14下 36上 拾9上 拾60上 拾87下 拾96上
- 2下 21上(並注) 40下(並注) 46上(疏) 60上  
39\* 郭知玄切韻 唐郭知玄撰  
28下 42上 53上 56下 61下 62下
- 63下(並注·疏) 69下(並注) 80上(並注) 86下  
40\* 韻銓 唐武元之撰  
61上(有書云武玄之曰) 106上(武玄云) 拾169下
- 88上(並注) 88下(並注) 102下(並注) 拾17下  
41\* 薩詢云〔薛詢切韻〕  
52下 54上 101上(薩詢云) 106上
- (並注) 拾41上(並注) 拾45上 拾66下(並注)  
42\* 孫愐唐韻 唐孫愐撰  
54上(孫愐云) 72下(唐韻云) 101上
- 拾90上下 拾97上 拾98上 拾105上 拾105下  
43\* 切韻  
3下
- 拾119上(並注)
- 28 孟子 漢趙岐注 61上(並注) 67上 93下 拾106下 44\* 釈氏云  
101上 106上 拾96上 拾169下
- 29 爾雅 晉郭璞注 28上 39下 40下 53上 61下(郭璞云) 74上  
45\* 廣韻 宋陳彭年等奉勅編  
2上 4上 11下 14上 15上 18上下 19上  
96下 拾27下 拾82上(小雅曰並郭璞云) 拾95下  
下 22下 32上 36上(大宋重修廣韻云) 40  
上下 41上 48上 52下 56下 62上 64上  
拾119上 拾124上 拾155上 拾169上 69下 78上 86下 87上 100下 拾9下 拾27  
下 拾61上 拾61下 拾85上 拾88下 拾150  
上下
- 30 方言 漢楊雄撰 94上
- 31 釈名 漢劉熙撰 4上 11下 30下 46上 54上 62下 96下 拾  
85下
- 32 廣雅 魏張揖撰 49上 74上 拾23下
- 33 說文 漢許慎撰 11下 32上 39下 49上 61上下 65上 74上 46 附釈文互註礼部韻略 宋闕名撰  
13下(上平声云) 14上 87上 拾96上

## 史 部

- 47 史記 漢司馬遷撰 劉宋裴駟集解  
36上 37上 39下 41上 45上下 60下 62下  
(周本紀並注) 71上 99下 100上(五帝本紀並注)  
100下 102下 拾58上 拾61下 拾62上 拾97上  
拾98下 拾100上下 拾102上下 拾103下 拾104  
上下 拾106上(孝文本紀並注) 拾106上下 拾  
119下 拾120上 拾126下 拾169上
- 48 漢書 漢班固撰 唐顏師古注  
3下 18上 46上(志並注) 46下(律曆志) 48上  
(並注) 51上 88上(藝文志) 拾65上(志) 拾85上  
(律曆志) 拾96上 拾104下 拾106上下 拾121  
上(地理志) 拾123下 拾133下(藝文志) 拾149  
上
- 49 後漢書 劉宋范曄撰  
13下 37下 40上 71下 77下 84上 97上 拾  
96下 拾97上 拾98上下 拾102上 拾105上 拾  
106上下
- 50 統漢書志 晉司馬彪撰  
4上(律曆志) 99上(禮儀志) 100下(輿服志)
- 51 晉書 唐太宗勅撰  
15上 23上 45下(五行志) 71下 拾9下 拾32下  
拾96上 拾105下
- 52 宋書 梁沈約撰  
拾136上
- 53 南史 唐李延壽撰  
拾77下
- 54 旧唐書 後晉劉昫等奉勅撰  
77下 88下(本紀) 98下
- 55 新唐書 宋歐陽脩等奉勅撰  
拾102下(刑法志序)
- 56\* 周書  
36下
- 57 竹書紀年  
88下
- 58\* 齊春秋 梁吳均撰  
拾100上
- 59\* 世本 漢宋衷注  
4 上
- 60\* 帝王世紀 晉皇甫謐撰  
36上 62上 81下 拾11上 拾49下(帝王說云)  
拾82上×
- 61\* 東觀漢記 漢劉珍等撰  
41下 62上 拾82上
- 62 國語  
19上
- 63\* 帝王年代曆 王道珪撰  
84下 85下(帝皇年代曆) 86下(帝皇年代曆) 拾  
6 上
- 64\* 大唐帝皇年代記  
89上
- 65\* 帝王授受圖  
85下
- 66\* 歷代帝王圖  
85下
- 67\* 歷代傳授國号紹運圖  
87上
- 68\* 隋圖  
85下
- 69\* 大唐圖  
93下
- 70\* 混沌圖  
87下(序) 拾133下(序)
- 71\* 混天圖  
95上
- 72\* 五運圖  
89上
- 73\* 陸氏通鑑  
86下 87上(帝王授受圖) 拾6(第三)
- 74 貞觀政要  
37上(第十) 52下 67下(第五) 68下(第二) 69  
上 70下(第五) 94下(第一) 拾96上 拾98上  
拾100下 拾101下 拾107上 拾135(第一)
- 75\* 三五曆記 吳徐整撰  
63上
- 76\* 魏文貞故事  
拾102上
- 77\* 孝子伝  
22上 40上
- 78 列仙伝 漢劉向撰  
21上
- 79\* 括地志<sup>原作圖</sup><sub>今改</sub> 唐魏王李泰撰  
拾11上
- 80\* 三巴記 蜀譙周撰  
99下

- | 子 部  | 94上× 拾135上×  |
|--|--|
| 81 孔子家語<br>21下 33上 48上 67下 拾57下 拾96上下 拾106下              | 101 本草圖經〔宋蘇頌撰力〕<br>57下 59上   |
| 82 賈誼新書 漢賈誼撰<br>36下 47上 拾106上                            | 102 本草衍義 宋寇宗奭撰<br>58上  |
| 83 塩鉄論 漢桓寬撰<br>18上                                       | 103 図注本草<br>58下 59上  |
| 84 說苑 漢劉向撰<br>拾97上 拾100下 拾104下                           | 104* 養生要集 晉張湛撰<br>56上  |
| 85 揚子法言 漢揚雄撰<br>拾104下                                    | 105* 星図<br>66上   |
| 86 潜夫論 漢王符撰<br>拾104下                                     | 106 五行大義 隋蕭吉撰<br>19上 27上 32上 33上 45下 46下 52下 64<br>上下 69上 78下 100上 拾57下 拾94下 拾<br>106上 拾120下 |
| 87* 傅子 晉傅玄撰<br>70上 拾100上                                 | 107* 陰陽書<br>49上 50上  |
| 88 帝範 唐太宗撰<br>97上 拾102上 拾106下                            | 108* 宿曜經<br>66上  |
| 89 臣軌 唐武后撰 旧題唐王德注<br>36下(下並注) 拾100上(下並注) 拾100下 拾<br>106下 | 109* 天地瑞祥志 唐薩守真撰<br>100上   |
| 90* 太極図説 宋周惇頤撰<br>63上(周茂叔云)                              | 110* 太一經<br>47上 拾65上   |
| 91 吳子<br>41下   | 111* 曆紀經<br>46下  |
| 92 黄石公三略<br>拾104下×                                       | 112* 六算返閤<br>65下(序)  |
| 93* 周書陰符<br>拾104下×                                       | 113* 筆勢集 唐积希一撰<br>23上  |
| 94* 政論 漢崔寔撰<br>拾106上                                     | 114 呂氏春秋<br>18下 36下 37下 70上 拾9上 拾102上<br>拾104下 拾125下   |
| 95* 桓範世要論 魏桓範撰<br>63下× 拾103下×                            | 115 淮南子 漢高誘注<br>44上 88上 拾58上 拾64上(並注) 拾95下 拾<br>102下 拾133下                                   |
| 96 鄧子 <small>原作劉<br/>今改</small> 旧題周鄧析撰<br>47下            | 116 劉子 北齊劉昼撰<br>65下 94上 拾91上 拾121下   |
| 97* 兼名苑〔唐〕积遠年撰<br>56下 拾125下                              | 117 顔氏家訓 北齊顔之推撰<br>拾59下(顔氏云) 拾104下(顔氏云)  |
| 98 齊民要術 後魏賈思勰撰<br>58下                                    | 118 白虎通 漢班固撰<br>1上 43上 46上 54下 67下 83下 拾2上<br>拾80下   |
| 99* 金谷園記 唐李邕撰<br>97下 98上                                 | 119 古今註 晉崔豹撰   |
| 100* 臨海異物志 口沈瑩撰  |  |

- 36下 拾60上 拾136下 拾155上
- 120 論衡 漢王充撰  
44上 拾11上 拾98上(瑞衡云)
- 121 風俗通義 漢应劭撰  
1上 78上
- 122\* 広志 晋郭義恭撰  
拾123上
- 123 西京雜記 旧題晋葛洪撰  
62下 78上 拾82上
- 124 山海經 晋郭璞撰  
62上 64上(郭璞云×) 拾82上 拾124上 拾135上
- 125 神異經 旧題漢東方朔撰  
44下 45上
- 126 漢武故事 旧題漢班固撰  
拾18上×
- 127 博物志 晋張華撰  
23下 88上
- 128 搜神記 晋干宝撰  
31下
- 129\* 語林 晋裴啟撰  
31下
- 130 王子年拾遺記 前秦王嘉撰  
4下 16上
- 131 統齊譜記 梁吳均撰  
98下
- 132 冥祥記 唐王琰撰  
24下
- 133 冥報記 唐唐臨撰  
24下
- 134 朝野僉載 唐張鷟撰  
14下
- 135\* 誠子拾遺原作試  
今改 唐李恕撰  
23上
- 136 初学記 唐徐堅等奉勅撰  
97上 98上 拾2上 拾9下
- 137 太平御覽 宋李昉等奉勅撰  
拾30上
- 138\* 翰墨新体  
拾32上
- 139 老子 旧題漢河上公章句  
48上 72上 拾91下(並注) 拾106上 拾120上
- (老子經序)
- 140 列子 晋張湛注  
1下 84上(並注)
- 141 莊子  
33上 88上 拾25下 拾60上 拾101下 拾134上
- 142\* 抱朴子 晋葛洪撰  
2下(抱朴子注曰) 39下 45下 61下 拾32下×  
拾60上 拾82上 拾90上(注) 拾96下 拾100下
- 集部
- 143\* 馮衍車銘 漢馮衍撰  
72上× 拾106上× 拾107上×
- 144\* 陶潛集 晋陶潛撰  
21上(桃花源記)×
- 145\* 賈嵩詩原作賈  
今改 劉宋賈嵩撰  
拾122下
- 146\* 李嶠百廿詠 唐李嶠撰 唐張庭芳注  
65下(李嶠史詩云並注) 拾19上(百詠注) 拾32上  
(百詠注) 拾88下(百詠注) 拾121上(李嶠史詩云  
並注)
- 147 白氏文集 唐白居易撰  
21上 60上 65下(新樂付) 94下(第廿九) 拾9  
下 拾17下(樂天百詠詩) 拾32(第五十七)
- 148\* 仁宗皇帝勸学語 宋仁宗帝撰  
78下
- 149 文選 梁昭明太子蕭統輯 唐李善等六臣注 闕名  
者集注  
14下 32上(張衡東京賦) 40下(西京賦) 45下  
46下(並注) 46下(並集注) 47下(崔瑗座右銘)  
61上(張衡東京賦並注) 65下 71下(註) 84上  
96下(西京賦) 99下(注) 100上 拾9下(注) 拾  
19上(並注) 拾85上 拾91上下 拾96上下 拾  
100上 拾101下 拾102上 拾104下 拾105下  
(注) 拾107上 拾121上下 拾149上(宋玉高唐賦)
- 150\* 樂府  
拾9下
- 151 文心彫龍 梁劉勰撰  
65上
- 出典不明書
- 152 孔子曰  
52下 61下
- 153 張晏云  
64下



が国で重修本が盛行するのは、室町時代に入ってからである。

(37)―(45) 仏典漢訳上の梵語研究は漢語への反省と刺激を与え、その結果音韻の学が興り、六朝から隋唐にかけて多数の韻書が出現した。その代表的のものは、隋の陸法言(諱は慈、字は法言か)の「切韻」(仁寿1年成)で、その後唐の儀鳳2年長孫訥言が文字を増加し箋注を附したのが、「長孫子箋注」である。その後玄宗の天宝10年孫愐がそれ等の韻書を増補したのが「唐韻」(「孫愐切韻」「広切韻」とも云われる)である。宋に入って、真宗の景德4年陳彭年は勅を奉じて、それ等を増補重修したのが、「大宋重修広韻五卷」である。「広韻」出でてより上記本を始め旧来の韻書は悉く亡佚するに至った。見在書目録によれば、六朝隋唐の韻書の多数が我が国に将来されたことがわかり、且つそれ等が諸書に引用されているが、宋の広韻が伝ってから我が国でもそれ等は伝を失った。

(37) 隋志兩唐志に「韻略一卷<sup>楊林撰</sup>」と。

(38) 上の「韻略」と同本か。

(39) 本書には「郭知玄云」「郭知云」として引かれ、それは見在書目録に「切韻五卷<sup>郭知玄撰</sup>」、広韻序に「前費州多田県丞郭知玄拾遺緒正更以朱箋三百字」と録されたのに該当するのであろう。

(40) 見在書目録に「韻詮十卷<sup>武玄撰</sup>」<sup>ニニ</sup>十二卷」、新唐志に「武元之韻詮十五卷」と。

(41) 広韻首序に云う「薛昉切韻」に該当か。

(42) 見在書目録に、「切韻五卷<sup>孫愐撰</sup>」、新唐志に「孫愐唐韻五卷」と。

(43) 隋唐の韻書に「切韻」の書名が多く、いずれを指すか未詳。恐らくは隋の陸法言の「切韻」か。

(44) 見在書目録の「切韻十卷<sup>積弘撰</sup>」か。

(56) 「周書」と称するものに、尚書の虞夏商周四書の一のそれ、漢志に、「周書七十一篇<sup>周史記。師古曰。劉向云周時詔誓号令也。蓋孔子所論百篇之余</sup>」<sup>周史記。師古曰。劉向云周時詔誓号令也。蓋孔子所論百篇之余</sup>といい、兩唐志に「孔晃注周書八卷」と録された説文に所謂「逸周書」なるもの、又それと別個の経路を経て伝えられた隋志に「周書十卷汲冢書、似仲尼刪書之余<sup>汲冢書</sup>」、兩唐志に「汲冢周書十卷」と録する所謂「汲冢周書」、(見在書目録に「周書八卷<sup>汲冢書</sup>」)、それに正史の「周書」がある。本書の引用の「周書」は尚書のそれでないことは明か、逸周書・汲冢周書(源流は一であろう)か正史のそのどちらかであろう。

(58) 隋志・見在書目録に「齊春秋三十卷<sup>梁奉朝請。吳均撰</sup>」、旧唐志「齊春秋三卷<sup>吳均撰(注旧志脱十字)</sup>」、新唐志「吳均齊春秋三十卷」と。佚書。說郭所収本は轉逸。

(59) 漢志に「世本十五篇<sup>古史官記黃帝以來。詔春秋時諸侯大夫</sup>」、隋志「世本二卷<sup>劉向撰</sup>」<sup>世本四卷<sup>宋衷撰</sup></sup>」、兩唐志「世本四卷<sup>宋衷撰</sup>」<sup>世本四卷<sup>宋衷撰</sup></sup>と。佚書。「宋衷世本四卷」を指すか。

(60) 隋志「帝王世紀十卷<sup>皇甫謐撰起。三皇尺漢魏</sup>」、旧唐志「帝王代記十卷<sup>皇甫謐撰</sup>」、新唐志「皇甫謐帝王代紀十卷」、見在書目録に「帝王世紀卅卷<sup>皇甫謐起。三皇尺漢魏</sup>」<sup>帝王代紀十卷<sup>皇甫謐撰</sup></sup>と。唐代まで通史として盛に用いられ、唐代の類書にその引用が多く見られる。我が国でも王朝時代使用されたが、その後和漢共に亡佚した。元明以来その轉存を企てるものが多く、最近では徐宗元輯「帝王世紀輯存」(1964年刊)が出た。しかしその復原は未だ不完全で、禹城の轉存は全て我が国に存する資料を使用していない。本書の引文の中にも徐氏の轉存に漏れているものがある。

(61) 隋志「東觀漢記一百四十三卷<sup>起光武記注至靈帝。長水校尉劉珍等撰</sup>」、旧唐志「東觀漢記一百二十七卷<sup>劉珍撰</sup>」、新唐志「劉珍等東觀漢記一百二十六卷又録一卷」。見在書目録に「東觀漢記百卅三卷<sup>起光武訖靈帝。長水校尉劉珍等撰</sup>」<sup>右隋書經籍志所載數也。而件漢記吉備大臣所將來也</sup>其目錄注云此書凡二本一本百廿七卷與集賢院見在書合一本百四十一卷與見書不合又得零落四卷又與兩本目錄不合真備在唐国多処營求竟不得其具本故且隨寫得如件今本朝見在百卅二卷」と。

漢の明帝の時創修、その後通修増続して靈帝の熹平中に至って成った。現在三史とは史記と前後漢書とを指すが、唐代までは後漢書ではなく、この「東觀漢記」を指したことは、「初学記」卷21史伝第2に「世以史記班固漢書及東觀漢記為三史矣」と記す通りである。しかし范曄の後漢書に章懐太子李賢の注ができてから、同書が漢記にかわって用いられたので、漸次散逸した。通行24卷本は主に永樂大典所載を以てせる輯補である。

我が国に於ても古く唐初の影響を受けて三史の一として重んぜられたが、後に後漢書が之にかわった。本書引用の62上・拾82上の2条は同文で、「東觀漢記云」として引くが、内容は「遊仙窟」の著者として邦人にはなじみの深い唐の張鷟字文成の誕生説話であるから、漢記の文ではない、撰者の間違である。

(63) 84下 引用に「帝王年代<sup>王道珪撰</sup>」として引用。未詳。見在書目録に「世代年号要歴一卷<sup>傅椅撰</sup>」帝王年代

歴十卷積靈実撰 ≡ ≡ ≡ ≡ 譜一卷張武撰 ≡ ≡ ≡ ≡ 曆八卷 ≡ ≡ ≡ ≡ 世歴二卷 年号一卷 ≡ ≡ 私記一卷 通歴十卷馬総撰と。「帝王年代歴八巻」に該当か。

(63)―(73) いずれも撰者その他未詳。上記の見在書目録雑史家部を見れば、当時我が国には簡便な通史、帝系譜、年代記の類が古くから将来され、使用されていたことは、奈良時代の正倉院文書中の写経目録の中に「帝曆並史記目録一卷」の如く、また入唐八家の請来目録の一たる「福州温州台州求得律論疏記外書等目録」には「帝王年代録一卷西明寺玄暢記」と見える所からも想像される。両唐志によれば唐代かかる種類の史書が多数撰編されたことが判る。それ等は悉く和漢共に亡佚した。(63)―(73)の諸書はこうした通俗史書であつたらしいが、それが以上の隋志・両唐史・見在書目録の著録諸本のいずれかに該当するの否かは明かでない。またこの中には漢籍ではなく、邦人の撰書が入っているかもしれない。

宋史藝文志の編年類・別史類の中にもかかる通史・帝系図・年代記の類が多数録され、煩を避けて例示せぬが、その中には本書引用の諸書とその書題が類似するものがかかり多いのに気づく。宋になると、出版業が営利として成立し、書肆の出版が隆盛となったから、需要の多いかかる簡便通俗的な史書はかなりの坊刻板が出たことは容易に推測し得る所である。

かかる啓蒙的な坊刻俗書の通例として書名を少し変えただけの大同小異の類似書が幾種類も出版されたと思われるが、片々たる俗書であるから、後世に遺ることは極めて稀である。してみると本書引用の年代記の類の大部分は唐代の撰書ではなく、入宋の禅僧等が持ち帰った新渡の宋板類の系統に基づいたものと考えらるべきではあるまいか。

(65) (67) 宋志に「崔侗帝王授受図一卷」「諸葛深紹運図一卷」「王起五位図三巻」の如き書名が見える。

(70) 混沌図 (71) 混天図は室町時代の国書にも引用されているのを見るが、いかなる書なるか未だ確かでない。筆者が多年疑問とする書である。ちなみに宋志に「混天帝王五運図古今須知一卷」というのが見える。

(72) 新唐志編年類に「広五運図卷七」「曹圭五運録十二巻」宋志に「王起五運図一卷 曹玄圭五運図一作録十二巻」と見えるが、果してそれに該当するか否かは明かでない。

(73) 未詳。86上の「煬帝大業十三年」十一月義兵入長

安遙尊帝為太上皇」の下に雙注を以て、「傍朱陸氏通勒恭帝為天子。文」と挿む。漢籍の書名としては「通勒」は見なれぬ題号である。勘は鑑の訛か。「宋史藝文志補」(編年類)に「陸唐老集百家音注資治通鑑一百二十巻會稽人」と著録されている。また静嘉堂文庫には、宋陸唐老編の「陸状元集百家註資治通鑑詳節」「増修陸状元集百家註資治通鑑詳節」(共に120巻首1巻)なる宋刊本(陸心源旧藏)2部が架蔵される。本引書は或はこの本に該当か。「通鑑」を書名とする例は司馬光の「資治通鑑」後であり、玄慧が鎌倉末資治通鑑の講義をしたことは有名であるから、とも角「陸氏通鑑」なる書は資治通鑑に関係ある新渡本であろうか。

(75) 旧唐志「三五曆記二巻徐整撰」、新唐志「徐整三五曆紀二巻」と。佚書。馬国翰の輯本がある。

(76) 見在書目録の旧事家に「魏文貞故事六巻」と。新唐志の故事類に「敬修文貞公伝事四巻 劉禕之文貞公故事六巻 張大業魏文貞故事八巻 王方慶文貞公事録一卷」、また雑伝類に「魏文貞故事十巻」と著録。佚書。清の王先恭が輯逸せる「魏文貞公故事拾遺三巻」(王益吾所刻書所収)がある。

(77) 主として六朝時代多種の孝子伝が成つた。隋志に「孝子伝讚三巻王昭之撰 孝子伝十五巻晋輔国將軍蕭広濟撰 孝子伝十巻宋員外郎鄭緝之撰 孝子伝八巻師覚授撰 孝子伝二十巻宋躬撰 孝子伝略二巻 孝徳伝三十巻梁元帝撰 孝友伝八巻」、旧唐志に「孝子伝十五巻蕭広濟撰 又八巻師覚授撰 孝子伝(讚)十五巻王韶之撰 孝子伝十巻宋躬之撰 雑孝子伝一卷 孝子伝一卷盧盤佐撰 又三巻徐広之撰 孝子伝讚十巻鄭緝之撰 孝徳伝三十巻梁元帝撰 孝友伝八巻梁元帝撰、新唐志に「蕭広濟孝子伝十五巻 師覚授孝子伝八巻 王蕭之孝子伝十五巻又讚三巻 宋躬孝子伝二十巻 雑孝子伝二巻 虞盤佐孝子伝一卷 徐広子伝三巻 鄭緝之孝子伝讚十巻 梁武帝孝子伝三十巻 梁元帝孝徳伝三十巻 申秀孝友伝八巻」と。見在書目録には「孝子伝図一卷 ≡ ≡ ≡ ≡ 讚十巻」と著録。此等はいずれも亡失したが、清人によって各種の輯逸が企みられておる。清原家旧蔵京都大学図書館現蔵の室町鈔本「孝子伝」(清原枝賢書写)や陽明文庫蔵室町鈔本「孝子伝」残本は、撰者を明にしないが、それ等逸書中の一種である。

本書に引用された孝子伝が上記のいずれに該当するか

明かでない。

(79) 旧唐志「括地志序略五卷<sup>魏王泰撰</sup> 括地志五百五十卷 又序略五卷<sup>魏王泰命著作郎蕭德言、祕書郎顧胤、記、室參軍蔣亞卿、功曹參軍謝偃、蘇助撰</sup>」見在書目録(土地家)に「括地志<sup>魏王泰撰元數六百卷</sup>圖書録只載第一卷」と著録。佚書。清孫星衍等の輯本あり。西園寺家旧藏書院部現藏鎌倉鈔本「管見記」巻6紙背には「括地志」の零巻を含む。

(80) 隋志(地理)に「三巴記一卷<sup>譙周撰</sup>」, 旧唐志(地理)「三巴記一卷<sup>譙周撰</sup>」, 新唐志(地理類)「樵周三巴記一卷」と著録。佚書。

(87) 隋志「傅子百二十卷<sup>晉司隸校尉傅玄撰</sup>」, 兩唐志「傅子一百二十卷<sup>傅玄撰</sup>」と。その後散逸し, 宋代僅かに23篇を存するにすぎなかった。現行本は永樂大典よりの重輯本。「群書治要」にも抄録。本書引用2条は同文で, 「臣軌」下誠信章からの孫引で, 臣軌の注もそのまま引いている。

(90) 「周茂叔云」として引いたこの引用文は, 宋代性理学の権輿をなした周濂溪の「太極図説」冒頭の部分である。年記の明かな本邦文献上に於ける宋明性理哲学の基本書の引用としては, 本引用は最も始見に属する。此は我が国の宋学伝来史上海に注目すべきことと言わねばならぬ。しかし, 此は本書の著者法空が「太極図説」の書をその本来の意味に於て読み, また宋学の影響を受けたということを必しも意味するものではない。且つ本引用は孫引であったようである。

濂溪の「太極図説」が何時我が国に将来されたかは明かでない。元來宋学と禅宗とは中国に於てもその成立に於て密接な関聯を有し, 鎌倉時代の彼我の禅僧の往來の間に宋学性理の諸書が伝わった可能性は当然想像される。が, 実際には鎌倉時代の禅僧の著作に宋学性理書からの引用は想像以上に極めて稀れである。しかし「太極図説」は短文であるから, 単行書としてではなく, 何等かの本に引用された全文が当時伝わり, 禅林の間に知られ, それが間接に法空の属した旧仏教の学僧へも伝わって来たという推測も一応成立しよう。しかし筆者はこの思想的な系路からの伝来とは別に, 本書の引用は寧ろ類書の利用によったものと推測したいのである。

法空と同時代人にして北畠親房の思想とも交渉を有する伊勢神道の度会家行の著で, 本書の成立年たる正和3年(1314)より6年後の元応2年(1320)の家行の自序を有する「類聚神祇本源」巻1の天地開闢篇にも, この「太極図説」を引用する。(家行撰「瑚璉集」にも引く。)

同書には「新端分門纂図博聞録曰周子通書曰」として引用されている。即ちこの太極図説は「新端分門纂図博聞録」なる書からの孫引であることが判かる。この「博聞録」なる書は今伝わらず, 詳にし得ないが, 書名から察すれば宋元頃流行した坊刻版の類書の一つであろう。宋元の頃受験用参考書にこうした類書は幾種類も書店から発行されたいが, 俗書であるだけに, 後世伝わるものが少く, 書目にも逸せられたものが多い。同書も宋史芸文志その他に著録を見ないが, ただ「宋史藝文志補」雑家類に「陳元靚博聞録十卷」と録されたのが, この本に該当するのであるまいか。元・明初間にかけ数種の異板が数えられ, また我が室町時代にかかり使用された類書にやはりこの元靚編の「事林広記」がある。この「事林広記」にも巻頭部に太極図説を引用する。「事林広記」が鎌倉末既に渡来していたか否かはわからぬが, とも角本書はこうした類の宋元板の類書を直接か間接かは別として利用したものと思われる。

「太極図説」は宇宙森羅万象一切の論理的成立の形而上学的図式, 天人を貫く倫理的基礎原理の形而上学的構想であって, 天地万物創造の生成論の説明ではない。事林広記等の通俗類書を始め, 本書や類聚神祇本源も共にそれを理解し得ずして, 陰陽天文術数占書類と等しく天地生成開闢論として利用している。従って本書が太極図説をを引用したことのみを以てしては, 所謂の宋学性理の書が邦人の目に触れ出した事実を物語るとしても, 思想的意味に於けるその講読理解影響を示す事蹟と認めるわけにはゆかない。

(93) 隋志(兵書)「周書陰符九卷」新唐志(兵書類)「周書陰符九卷」と。佚書。同文の引用が「初学記」にも見られる。

(94) 見在書目録(法家)に「政論五卷」と見え, 「政論」の書名は, 隋志(法家)は「正論六卷<sup>漢大尚書崔寔撰。梁有法論十卷, 劉邵撰。政論五卷, 魏侍中劉廣撰。阮子正, 魏清河太守阮武撰。亡</sup>」, 旧唐志(法家類)に, 「崔氏政論五卷<sup>崔寔撰</sup> 劉氏法言十卷<sup>劉邵撰</sup> 劉氏正論五卷<sup>劉廣撰</sup> 阮子政論五卷<sup>阮武撰</sup>」, 新唐志「崔氏政論六卷<sup>崔寔撰</sup> 劉氏法論<sup>劉邵撰</sup> 劉氏政論五卷<sup>劉廣撰</sup> 阮子政論五卷<sup>阮武撰</sup>」と。いずれも佚書。崔・劉・阮の三氏の政論には馬国翰の輯本がある。本書の引文は「群書治要」に収録する崔寔政論の文中に見える。鎌倉初の藤原孝範編「明文抄」も同文を引用している。

(96) 隋志「世要論十二卷<sup>魏大司農桓範撰</sup>」, 旧唐志「桓氏代

要論十卷恒範撰，新唐志「桓氏世要論恒範」。佚書。「群書治要」に収録。清の嚴可均・馬国翰の輯本あり。本書引用 2 条は同文で、「群書治要」「初学記」も同文の引用を含む。

(97) 見在書目録(雑家)に「兼名苑十五今案冊卷」，旧唐志(名家)「兼名苑十卷積遠年撰」，新唐志(名家)「僧遠年兼名苑二十卷」と。佚書。この本は具決外典抄にも引用さる。

(99) 新唐志(農家類)に「李邕金谷園記一卷」と。「中興館書目」の時令類にも著録。佚書。「明文抄」にも本書からの引用 1 条が存する。

(100) 旧唐志(地理)「臨海水土異物志一卷沈瑩撰」，新唐志(地理類)「沈瑩臨海水土異物志一卷」と。説郭所収輯本がある。本引用の 2 条は同文，「初学記」も同文を引用。

(104) 隋志(医方)に「養生要集十卷張湛撰」，兩唐志には道家・医術の兩類に「張湛養生要集十卷」と著録。佚書。「祕府略」，覚明の「三教指帰注」等にも引かれる。「具決外典抄」に「養生要集」として引くのも同一書か。

(105) 隋志(天文)に「星図二卷劉有星書」，新唐志(天文類)に「孝経内記星図一卷 周易分野星図一卷」等が見えるが，本引用書は未詳。

(107) 見在書目録(五行家)に「太唐陰陽書五十一卷 新撰陰陽書五十呂才撰」，旧唐志(五行)に「陰陽書五十卷 呂才撰 新撰陰陽書三十卷王粲撰」，新唐志(五行類)に「呂才陰陽書五十三卷 王粲新撰陰陽書三十卷」と著録。そのいずれか。馬氏輯本に呂才撰「陰陽書」一卷あり。

(108) 見在書目録(五行家)に「新撰宿曜経七」と著録せる書か。

(109) 見在書目録(天文家)に「天地瑞祥志廿」と著録。佚存書。尊経閣文庫に残本 9 卷の鈔本を存する。

(110) 隋志(五行)に「太一經二卷宋琨撰」，旧唐志(五行)「式經一卷宋琨撰」，新唐志(五行類)「宋琨式經一卷」，見在書目録(五行家)に「太一經二宋琨撰 太一經一周氏撰」と。佚書。

(111) (112) 未詳。

(113) 見在書目録(小学家)にのみ「筆勢集一卷積希撰」と著録。佚存書。書道論の書。書陵部に東寺觀智院藏本によるという江戸鈔本，陽明文庫また江戸写本を蔵す。

(122) 隋志(雑)「広志二卷郭義恭撰」，新唐志(雑家類)「郭

義恭広志二卷」と。佚書。馬氏輯本・説郭収本あり。

(129) 隋志(小説)に「語林十卷東晋処士裴啟撰」と。佚書。当時既に聞きなれぬ稀書であつたらしく，「語林」には特に「外典」と傍記の書入が附してある。「初学記」に引用あり。「祕府略」にも引く。説郭収本・馬氏輯本あり。

(135) 新唐志(小説家類)に「李恕誠子拾遺四卷」と著録。佚書。

(138) 未詳。宋元間の坊刻類書の一つか。

(142) 2下に「抱朴子注曰」として引くが，「抱朴子注」の書未詳。

(143) 引用の 3 条共に同文，「初学記」も同文を引くから，その孫引であろう。

(144) 隋志「宋徵子陶潛集九卷梁五卷 録一卷」，旧唐志「陶洌明集五卷」，新唐志「陶潛集二十卷 又集五卷」，見在書目録「陶潛集十」と著録。本引用は有名な「桃花源記」で，「初学記」も引き，恐らくはその孫引か。

(145) この引用文は「倭漢朗詠集」巻上鶯に「鳳為王賦」として収められ，「私注」以下唐の賈島の作とするが，賈嵩が正しい。新唐志に「賈嵩賦三卷」と著録するが，佚書。本引用は朗詠集より引いたものと思われる。

(146) 見在書目録「李嶠百廿詠一」，新唐志「李嶠雜詠詩十二卷」(私案十字衍)と。支那では夙に佚したが，わが国では平安以来「李嶠雜詠」「李嶠百詠」とも称して，広く愛讀され，嵯峨天皇宸翰を始めとする古鈔本が存し，唐人の注も慶応義塾大学蔵室町鈔本等が伝わる。

(148) 仁宗帝の勸学文は「古文真宝」前集に収められているので，室町以後現在は同書によって普及しているが，鎌倉末に古文真宝が我が国に伝っていたか否かは不明である。古文真宝とは別の宋元間の類書の如きものから引いたかもしれぬ。

(150) 「楽府云」とのみ書して，何書を指すか明かでない。しかしこの引用の文は実は礼記内則篇のそれである。

#### IV. 結

以上の如く，本両書に引かれた漢籍は百数十部に上り，能く力めたりと称すべく，著者法空の学才の富贍なるを物語っている。しかしこの引用の悉くが直接原典によつたとは考えられず，先行の種々の図書を利用し，それらからの孫引が多数あるものと思われる。先ず類書の使用が当然考えられる。当時わが国で使用された類書としては，唐魏徵等奉勅撰「群書治要五十卷」，唐欧阳詢撰「藝文類聚一百卷」，唐徐堅等奉勅撰「初学記三十卷」，

唐白居易撰「白氏六帖事類集三十卷」、宋李昉等奉勅撰「太平御覽一千卷」があげられる。和漢共に佚亡した北齊顏之推等奉勅撰「修文殿御覽」、僅に零巻を我が国に伝える「瑠玉集」「翰苑」、また平安朝の勅撰「祕府略一千巻」の如きは、鎌倉末には恐らく伝を失ったも同然で、法空は利用し得なかったと思われる。

法空が確実に使用したことを実証し得るのは、本書に書名をあげて引用している「初学記」と「太平御覽」である。「初学記」の書名をあげての引用は僅か4条にすぎぬが、同書と同文を本書が引用し、恐らくその孫引と推測されるものが多数あることは上に指摘した通りである。「初学記」の巻数は類書としては比較的ハンデイであるから、我が国では愛用されたようである。「群書治要」は古来我が国では極めて重要視され、法空がそれを利用した確証はないが、本書の引く「崔氏政論」「桓範世要論」の如きは、現在の輯本も「群書治要」に主な資料を仰いでいる。法空は直接「治要」を使わなかったとしても、我が国に於ける両書の祖源は直接原典にあるのではなく、「治要」にあったと考えるべきであろう。法空の引用には間接的には「治要」の流沢に浴すること多いものがかかり存するのであるまいか。旧来の本邦伝来の類書の外に、法空が新渡の宋元の坊刻の類書を使用した形跡の推測されることは、証注に述べた通りであるが、此は未だ推定の域を出でず、確証するには至らない。

外典漢籍を多く引用輯集せる国書の中で法空が参考に資したことがその引用書名から明かなのは、具平親王の「弘決外典抄」、沙門盛安の「三教指帰注」、覚明の「三教指帰注」、信教の「朗詠私注」、実光房の「朗詠注」、藤原孝範の「明文抄」、菅原為長の「文鳳抄」等である。いずれも平安から鎌倉初に至る間の撰述にかかる。本書は注釈の態度様式に於ては三教指帰注や朗詠抄注のそれを踏襲している。以上の国書の引用文と本書のそれとを精密に対比査定する余裕を有さなかったが、「明文抄」にそ

の一例を上指しした如く、それ等からの孫引も含んでいることと思われる。「朗詠私注」「三教指帰注」の引文と本両書のそれと合致する所がある。

我が国の漢学は奈良・平安以来唐の学風の影響を深く受けている。宋の新学風は鎌倉末から始まって時の降るにつれて、その色彩を濃厚にして来るが、大勢としては唐の遺風が室町末まで一千年近く続いたと言ってよい。その点仏教が比較的早く大陸の潮流を敏感に受け入れて進んで行ったのに比して、甚だ緩慢である。鎌倉末、朝廷に宋学の風が一時たかまり、五山叢林の一部に唐宋古文、宋体の詩の誦習を見たが、その後の進展は極めて徐々たる経路を辿っている。此は我が国の文化の大勢の基調は、長い間仏教にあったことを物語るものである。儒学は甚だ不振で、漢学は故実や詞章文辭の学で、仏教の修辭上の補助学たるの觀を呈したと言ってもあながち酷評とは称しきれぬ。

旧仏教に属する法空の注釈引用の学風態度は当時の漢学界の大勢を示すもので、博学ではあるが、旧来の学風の圏内にあるものである。その詩文は「文選」「白氏文集」を出でず、引用書の殆どは日本国現在書目録著録本、即ち平安中期までに既に伝来された唐以前の書籍である。宋代の著書には「大広益玉篇」「大宋重修広韻」「互注礼部韻略」「新唐書」「太平御覽」等があげられる。それ等は台記・宇槐記抄・通憲目録に見えるから、平安末までには我が国に将来されたものである。

しかし、その旧態のままに停滞している漢学界にも時代の推移は争われぬ。本書が周濂溪の太極図説、仁宗皇帝勸学文を引き、宋・元坊刻の類書や簡便な通史・年表の類、司馬光の資治通鑑の関聯書と思われる陸氏通鑑等を使用した形跡を示していることは、宋の新学風の影響を受けたとは称し得ぬにしても、宋風の新学問が我が国に漸次浸潤して行く兆候を示唆しているものとして注目すべきである。